多世代化する社会的孤立抑制の提案

～理想の居場所とは何か～

札幌大谷大学社会学部地域社会学科

18SL025　　高橋 孝明

○目次

第 1 章「はじめに」・・・・・ P. 1

第 2 章「社会的孤立とは」・・・・・ P. 2-4

2-1「社会的孤立の定義」・・・・・ P. 2

2-2「社会的不利による社会的孤立の事例」・・・・・ P. 2-4

2-3「社会的不利が及ぼす社会的孤立のメカニズム」・・・・・ P. 4

第 3 章「居場所作りとは」・・・・・ P. 5-9

3-1「居場所の定義」・・・・・P. 5

3-2「居場所づくりの事例」・・・・・P. 5-7

3-3「居場所づくりのプロセス」・・・・・P. 7-9

第 4 章「理想の居場所をつくるために」・・・・・P. 10-19

4-1「理想の居場所に必要な要素」・・・・・P. 10-12

4-2「「交流」という観点」・・・・・P. 13-16

4-3「目指すべき交流の度合い」・・・・・P. 16-17

4-4「居場所に引き込む方法」・・・・・P. 17-19

第 5 章「おわりに」・・・・・P. 20

参考文献・・・・・P. 21

1. はじめに

近年では、孤独死者数の増加と多世代化が進んでいることをご存じだろうか。一般社団法人日本少額短期保険協会 孤独死対策委員会の『第 5 回孤独死現状レポート』(2020 年)によると、孤独死を「自宅内で死亡した事実が死後判明した 1 人暮らしの人」と定義した時、65 歳未満の孤独死者数は、男女ともに全体の 50%を超えていることが明らかになった。また、男女別死亡年齢の構成比のデータ(表 1)では、4188 人のうち現役世代の中では、20 代が 4.3%・30 代が 6.7%・40 代が 10.3%・50 代が 18.8%となっており、孤独死リスクが広い年齢層に分散していることが分かる。以前までは「孤独死は高齢者の問題」という意識が世間にはあったが、このレポートから現代において孤独死は高齢者だけの問題とは言えなくなってきていることが表れていると言えるだろう。

表 1 男女別死亡年齢の構成比

	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	合計	現役世代の割合
全体	179	281	431	786	1,239	938	334	4,188	-
割合	4.3%	6.7%	10.3%	18.8%	29.6%	22.4%	8.0%	100%	40.0%
男性	121	211	345	691	1,099	805	222	3,494	-
割合	3.5%	6.0%	9.9%	19.8%	31.5%	23.0%	6.4%	100%	39.2%
女性	58	70	86	95	140	133	112	694	-
割合	8.4%	10.1%	12.4%	13.7%	20.2%	19.2%	16.1%	100.0%	44.5%

※一般社団法人日本少額短期保険協会 孤独死対策委員会『第 5 回孤独死現状レポート』より

かつて孤独死は高齢者の問題としてカテゴライズされていた。しかし、何故、現代になって孤独死は広い世代に向けて広がりを見せつつあるのだろうか。

本稿では、上述した孤独死の増加と多世代化の現状を踏まえた上で「社会的孤立」に注目して孤独死多世代化の要因について考察する。また、孤独死の前段階である社会的孤立を防ぐことまたは孤立化からの復帰を目的に、社会的孤立を防ぐためにはどのような「居場所(コミュニティカフェ等)」が望ましいのかを先行研究や事例を概観した上で、「交流」という観点を基に模索することが本稿の目的である。

2. 社会的孤立とは

□ 2-1 社会的孤立の定義

社会的孤立という概念には明確な定義が存在しない。研究者によってさまざまな定義が定められており、厚生労働省の『社会的孤立の実態・要因等に関する調査分析等研究事業報告書』(2021)によると、先行研究による社会的孤立の定義は、①社会的交流の欠如型孤立、②社会的サポート(受領)の欠如型孤立、③社会的サポート(提供)の欠如型孤立、④社会参加の欠如型孤立の 4 つのタイプに分かれているとした。

①の社会的交流では、直接会って交流する「対面接触」と、電話や電子メールで交流する「非対面接触」、もしくは会話頻度を指標として定義している。

②の社会的サポート(受領)は、定義として社会的交流の次に使用されており、病気の時の世話やお金の援助といった「道具的サポート」と、人生相談や愚痴を聞いてくれる相手などの「心理的サポート」を行ってくれる頼れる存在の欠如を指す。

また、③の社会的サポート(提供)は、社会的サポート(受領)とは違い、「自分を頼ってくれる存在がいない」という欠如によって定義されたものである。「頼ってくれる存在がいない＝自分は必要とされていない」という感覚に陥り、豊かな人間関係の構築にはサポートを受けるだけではなく提供する相手がいることも重要だという考えに基づいている。

④の社会参加では特に社会的排除を研究する文献からいくつか散見されており、指標として町内会やボランティアへの参加の有無を用いて定義している。

これら接触や対話、社会的サポートおよび社会参加を広い意味での社会参加として捉え、本稿では社会的孤立を**「社会的不利によって家族や友人、地域社会との交流を絶ってしまっている状態」**と定義したうえで研究を進める。

□ 2-2 社会的不利による社会的孤立の事例

ここで言う社会的不利とは、貧困や病気、リストラや離婚、離別など健全な社会生活を送る上において不利になる要因を示す。このような社会的不利が社会的孤立状態につながる事例がいくつか存在する。著書『家族遺棄社会 ～孤立、無縁、放置の果てに～』(菅野 2020)では、実際に二人のセルフネグレクト経験者の話が綴られているため社会的孤立の例として紹介する。一つ目の事例は母親からの嫌がらせを受けていた女性である。彼女は妹の他界を母親に「お前のせいだ」と罵倒されその傷をパチンコや占いで塞いでいたが、あることをきっかけに会社から報復人事を受けたことでさらなる精神的負担を負いセルフネグレクトへと陥ってしまった。二つ目の事例は妻と離婚した男性である。彼は 50 代の頃に妻と離婚し、実家で一緒に暮らしていた母親は特別老人ホームに入所してしまう。その後、男性は排泄障害を患いおむつを履くことになり日々身体が弱っていったがプライドから助

けを求められずにセルフネグレクトへと陥ってしまう。

これら退職や病気といった事例は 40 代～50 代に多い。

上述した女性の話とは少し異なるが、今まで職場を唯一の交流の場としていた場合は離職によって拠り所を失い、それまで築いていた人間関係が無くなってしまう（途切れてしまう）ことによって社会的孤立へと陥っていく。これに関しては、主に定年を迎えて会社や企業から退職した男性に多い。それまで、隣人などといった職場とは違う環境でつながりを構築してこなかったために付き合い方が分からず、自身のプライドも相まって地域社会からの孤立に陥ってしまう。

病気によって社会的孤立に陥ってしまったケースは、何らかの要因によって助けを求められないという事態から発生する。例として親族と疎遠になっている、身内に迷惑をかけたくないという思い、自分を弱く見せたくない・頼りない姿を見せたくないといったプライドなどが挙げられる。その結果、病気が悪化してしまい、自分の生活の世話を自分でできなくなってしまうセルフネグレクトや、最悪の場合だと孤独死に陥ってしまう。

また、20 代～30 代の若い世代も社会的孤立に陥る可能性や事例といったものが存在する。

著書『孤族の国』（朝日新聞「孤族の国」取材班 2012）では、孤立化してしまった若者や、孤立によって引き起こされた出来事をいくつか紹介している。その一部を事例として取り上げる。

2009 年にうつと診断された 20 代男性は、離婚した両親から援助も受けられず 21 歳という若さで生活保護を申請した。高校を卒業し地元を離れ東京のアニメ・ゲーム制作の専門学校に進学するも、希望の職種に就けず非正規労働を繰り返した。様々な職種を経験するが作業の遅さやミスの連続により追われるように職場を去った。このことから、一定のつながりを保てず、定期的に更新しているブログにて「人とつながりたい」という思いを綴っている。

そして、孤立によって引き起こされたであろう事件も存在する。茨城県のとある工場に勤務していた期間契約の社員が、中高生らが乗るバスで不特定多数の未成年に刃を向け負傷させたという事件を引き起こした。その男性が働いていた工場の上司によれば、男性の仕事は丁寧で、話しかけるとしっかりと受け答えしていたという。県警の捜索時、男性の部屋にはテレビやパソコンといった外界とつながる道具は一切なく、携帯電話も持っていなかった。弁護士によると事件の動機については「表現しづらい」と話しており、男性が勤務していた工場の元上司は「一人が好きなのかと思ったが実は違ったのではないか。してやれることがあったのではないか。」と思うと同時に、「子どもたちを傷つけたのはしかりつけたい」と話した。弁護士を通じてそのことを知った男性は「そんな風に思ってくれる人がいたんだ」と話した。この事例は明確に孤立が原因で事件を引き起こしたという記

述はない。しかし、外界や人とのつながりを保てる道具がないことや元上司の言葉を聞いた男性の反応がその根拠になり得るのではないかと考えられたためここに紹介する(朝日新聞「孤族の国」取材班 2012)。

20 代～30 代の社会的孤立の事例の一部を紹介した。この他にも、インターネットの生放送で自殺を決行した男性や、怪しい宗教に入ったことによって外界とのつながりを絶った事例、留年を機に不登校になった大学生など様々な事例が存在する。

以前まで私は、先ほども挙げた病気や離婚、リストラといった社会的不利は 40 代～50 代のいわゆる中年と呼ばれる世代や 60 代以上の高齢者に比べて人生経験や今まで生きてきた時間が短いことから起きにくいのではないかと考えていた。しかし、これらの事例は、「社会的不利による社会的孤立はどの世代の誰の身にも起きうることである」という考えに変化させるきっかけとなった。そして、社会的孤立が多世代化する根拠とそれを防止しなければならいという動機にもなり得ると考えられた。

□ 2-3 社会的不利が及ぼす社会的孤立のメカニズム

上では社会的不利が及ぼす社会的孤立の事例についていくつか紹介した。あれらの窮状に陥った人々は具体的にどのような過程で孤立化してしまうのか。

社会的不利が社会的孤立状態をもたらす過程を示した先行研究がある。石田史樹は社会的孤立問題の「社会的」の意味を考察する研究の中で、社会的孤立状態を貧困化という視点から歴史的・動態的に把握することが重要としており、元ホームレスを対象に聞き取り調査を行った。元ホームレスの生活史を不安定住の段階、路上生活の段階、生活保護普及による路上生活脱却後の段階に分けつつ、①各段階において、助けを求める相手とその情報の喪失、および自尊心の喪失が見られること、②生活保護受給が自尊感情を取り戻す妨げになっていること、および③生活史の特徴として、流動性・共同性の喪失・低所得・組織性・生活力(生活意欲)の後退・アイデンティティーの喪失が挙げられることを指摘している(石田 2020)。

以上、社会的不利が社会的孤立状態を及ぼすことを、これら二つの実証研究から概観した。この現象を敢えて形式的にまとめると「社会生活を営んでいて何か社会的不利が起こり、傷心による自尊心の喪失、および情報や助けを求める相手の喪失によりセルフネグレクト等に陥ってしまう」という大まかな流れが確認できる。

3. 居場所づくりとは

前章では社会的不利による社会的孤立の表れを二つの先行研究を用いて確認した。本章では、このような社会的孤立を防ぐ(もしくは復帰させる)ための取り組みとしてどのようなものがあるのかを最初に居場所の定義を説明してから、本研究のテーマである「居場所作り」に焦点を当ててその国内外の事例を以下に紹介する。また、それと同時に事例を紹介した後、居場所づくりのプロセスとその中で重要となる部分を、先行研究を用いて紹介を行う。

□ 3-1 居場所の定義

まずは本研究における「居場所」とは何なのかという確認を行う。ここで言う居場所とは、コミュニティカフェや何かしらの支援サービスを行い、多様な参加者を人もしくは地域と結びつけるようなコミュニティの空間を指して言う。そして、条件として家庭や学校・職場ではなく、それら以外で拠り所となり得る場所、いわゆる「サードプレイス」であることを前提として、社会的不利による社会的孤立に苦しむ人々の課題解決を目的とする。

ここで重要になるところは、「**多様な参加者を人もしくは地域と結びつけるようなコミュニティの空間**」という点である。本稿の 2 章 1 節で社会的孤立を「社会的不利によって家族や友人、地域社会との交流を絶ってしまっている状態」と定義した。当事者が陥っている社会的不利を解決することは重要な要素である。しかし、その社会的不利を解決するだけでは、当事者たちの孤立を必ずしも解決できるわけではない。社会的孤立には様々な定義があるが、「つながり」が孤立を解消できるという前提で考えれば、当事者を人と(もしくは地域社会と)繋ぐことで孤立化を解消できる点では、社会的孤立を考える人々の中で共通していると言える。

以上のことから、本研究では上述した居場所の定義で研究を進める。次の節では、国内外の居場所づくりの事例を 3 つ紹介する。

□ 3-2 居場所づくりの事例

(1) 『活き生きサロン　寄ってっ亭』

静岡市清水区にある常設型の居場所で、NPO 法人泉の会代表である藤下氏を中心に自分たちの老後の居場所を憂慮して作られたものである。お泊りサービスから囲碁や卓球などの娯楽による交流の場の提供、ボランティアの方々によるリサイクル作品の販売や地域の新鮮野菜の販売などを手掛けている。また、民生委員を中心とした人を呼びかけ「おいさ

ん・えびすケア会議」と呼ばれる見守りネットワークを構築している。この施設では、あるS型デイサービスの利用者である男性の生活の補助を行っていたことが起因して脳出血で倒れていたところを早期発見できたことや、買い物難民に陥っていた高齢者を寄ってっ亭の調理担当者が自分たちの買い出しと一緒にその高齢者の買い物を購入してくるというサポートを行ったという実績がある（東野(2014)より）。

(2) 『コミュニティカフェ「カフェ蔵」』

静岡県静岡市駿河区の豊田地区にあるコミュニティカフェで、地域の誰もが気軽に立ち寄り、気兼ねなく過ごせる公民館を利用した地域住民のコミュニティカフェである。毎月第四金曜日の 10 時～15 時まで運営しており、子どもから高齢者まで幅広い層が利用している。S型デイサービスの中間に存在しており、デイサービスの代替としての需要がある。小鹿豊田地域包括支援センターと連携しており、カフェの利用者同士の見守りや訪問を行いカフェの利用の促進を行っているといった互助の中での見守りを実践している （東野(2014)より）。

(3) スウェーデンの青少年・若者のひきこもり支援『Dev』

Dev はスウェーデンのストックホルム市調整協会が実施している不登校・ひきこもりの子ども・若者支援プロジェクトの一つである。特徴としては16～29歳の子ども・若者の中でもアニメやゲーム、インターネットに没頭している者を対象としている。彼らの意識や先入観には「自分たちを受け入れてくれる場所はない」「社会の最下位に放置された存在」といったものが存在している。Dev では彼らに対して対等な関係性を気づくことを重視し参加者の子ども・若者はスタッフのことを日本語の「Senpai(先輩)」と呼び、彼らの好きなもの得意なものを職業に活かせるように活動を行っている（石川 他(2021)より）。

以上では国内外の3つの事例を紹介した。(1)(2)では社会的孤立の防止として(3)では社会的孤立からの復帰としての居場所の機能を発揮している。

東野の研究の調査では、(1)(2)のような居場所の効果として「おしゃべりができる」「友人ができる」など参加者から参加した際の好印象な所感を貰えており、利用後も「近所の人と以前より話す機会が増えた」「悩みを相談できる人が増えた」などの変化も訪れていることが判明した(東野 2014)。これらの居場所の強みとして、定期的に開催していること、気軽に参加できるということが挙げられる。定期的に開催することは有事の際の頼みの綱として利用することも可能であり、『コミュニティカフェ「カフェ蔵」』のようにあえてターゲットを絞らず多世代の人の参加ができれば新しく利用しようとする人にとっての参入障壁の撤廃にもつながる。

(3)のスウェーデンの事例は社会的孤立からの復帰の役割がある。当事者たちの自立を目

的としており、それと同時に当事者が居場所として居心地がいい環境にする必要がこのような居場所作りには欠かせないことが石川ら(2021)の研究で明らかになった。そのカギを握るのが「対等な関係を築く」ということだろう。前述した通り、社会的不利によって社会的孤立に陥ってしまった人は何かしらの精神的負担を負っていることから孤立化している。対等な関係を築くことを自立支援に活かすならば、一方的に接するのではなく、当事者の話をよく聞き一緒に考えることがこのような居場所づくりにおいて重要であると言える。

□ 3-3 居場所づくりのプロセス

福祉の領域にて求められる居場所づくりのプロセスについて研究しているのが熊田博喜である。この研究では、福祉の領域における居場所の系譜とその類型化、居場所づくり展開または展開後のプロセスの手法を紹介した。

熊田は、居場所を「家庭や職場・学校ではない、多様な人が自発的に出入りし交流できる場の総称」と定義した。これに関して、居場所には、誰でも利用ができるオープン型、決められた人(貧困家庭の家族、障がいを持った人等)しか利用できないクローズ型に分かれていると補足したうえで、定義の中の「自発的に出入りし交流できる場」という共通の特徴を見出している。

そして、居場所づくりの展開プロセスは①個別課題の重視、②傾聴、③居場所の構成要素と実施体制の確認、④プレ開催と振り返り、⑤開催の 5 つのプロセスに大別できるとした。

ここでは、姉が認知症を患う高齢姉妹と居場所づくりを行う事例に基づいている。①で社会福祉領域の居場所作りでは住民の課題解決が前提であるとした上で、②の傾聴を行うことによって、相談者(ここでいう高齢姉妹)の価値観やストレングス(強み)をそれまでの人生経験や本人の性格などから聞き出していくことが重要であるとした。そして、③では、「居場所の目的を開設に関わるメンバー間で共有すること」「開設する居場所が立地する地域の関係構造への配慮」が重要であるとし、④のプレ開催を行うことによって居場所の開催が負担になっているメンバーがいないか等の、役割分担の確認をしてメンバー間に供することが重要だと指摘していた。

また、居場所を作ったあとの運営の仕方についても言及している。運営のプロセスは 4 つに分かれており、㊀つなぎたい利用者との関係構築と居場所へのつながり、㊁メンバーとの関係形成による利用者―居場所との折り合い―、㊂役割を担うことによる包摂の経験、㊃利用者の客体から主体への変化に分かれているとした。

大まかな流れとして、㊀で利用者をアセスメントして背景や状況を明らかにすることで居場所や地域の行政機関に繋がれるようにし、㊁では、利用者を居場所のメンバーとの関

係性構築を行う。その際に、利用者が居場所のメンバーにどれだけ共感してくれるのかが重要となり、利用者の個人情報の開示がカギとなるとしている。情報の開示と共有で関係性を作り上げた後に㊂の工程で利用者に役割を担わせて自己実現を図らせ、㊃で利用者が居場所の参加者という立場から、積極的に居場所を作り上げる・発展させる等の行動で、利用者を主体的に人や場所と繋がれる状態にする。これが居場所を作り上げた後の実施においてのプロセスであるとした（熊田 2018）。

以上が、熊田が分析した展開・展開後の居場所のプロセスである。これらのプロセスの特徴は先ほど紹介した事例の中でも随所にみられる。

例えば、『コミュニティカフェ「カフェ蔵」』では、「③居場所の構成要素と実施体制の確認」が確認できる。このプロセスは、「居場所の目的を開設に関わるメンバー間で共有すること」「開設する居場所が立地する地域の関係構造への配慮」という二つの重要事項があるが、その中でも、「開設する居場所が立地する地域の関係構造への配慮」が明確に確認できる。

カフェ蔵がある静岡県駿河区豊田地区には、市の対策として S 型デイサービスが 3 か所展開されている。しかし、それぞれの開催場所が離れているためサポートが手薄になってしまう箇所が出てきてしまう。そのためカフェ蔵は、各施設の中間に開催してサポートが手薄となった場所を補う形で運営を行っている(東野 2014)。

このように、地域の S 型デイサービスの立地を配慮した様子から③の特徴があてはまると考えられる。この立地は、その地域に住まう高齢者の需要を上手くくみ取っており、居場所を設立する上で立地において参考になる事例であると言える。

また、3 つの事例とも「①個別課題の重視」の様子が見て取れる。スウェーデンの Dev のような、「若者のひきこもり支援」というある一定の層に向けた取り組みを行っているところだけではなく、寄ってっ亭やカフェ蔵のように比較的オープンな居場所でも課題解決の姿勢がみられる。特に寄ってっ亭の買い物難民の事例がそれにあてはまる。参加者がそのコミュニティ内で他者とつながることは孤立化の解消につながるのは自明の理であり、孤独死防止の観点でも重要なことである。しかし、なにかしらの社会的不利を背負った参加者となれば話は変わる。個別課題の重視というプロセスは、ただその居場所に通ってお茶菓子を嗜むだけでは課題は解決されず、その居場所に通うことで「何か困っていることを解決してくれる」という要素は必要なものであるという確認となった。

そして、(熊田本人も論文内で言及していたが)個別課題の解決には②傾聴が重要であることも確認できた。先ほど挙げた買い物難民の事例は、参加者の相談にスタッフが真摯に向き合った姿勢が背景に見て取れる。スタッフが傾聴を心掛け、買い物が不便なことにどれほど苦しんでいるかが理解できたからこそこの問題は解決されたのだろうと考えられる。この他にも、スウェーデンの Dev や熊田の研究の中で出てきた高齢姉妹の事例からも傾聴

の重要性が理解できる。

これらプロセスが先ほど挙げた事例にあてはまることから、熊田が分析した居場所のプロセスは居場所づくりにおいて、またその運営において必要になっていることであると考えられる。次章では、本章の熊田の研究のおさらいをしつつ「交流」という独自の観点を用いて、副題にもある「理想の居場所」のために必要な要素を探る。

4. 理想の居場所をつくるために

前章では、国内外の社会的孤立防止の事例をいくつか紹介しそのそれぞれの機能について考察した。また、その居場所づくりのプロセスを先行研究から概観し分析を行った。しかし、居場所の機能や働きは判明したが、それら効力を発揮するために必要な要素とは何なのだろうか。そして、その要素を生み出す際に必要になるものはどこにあるのか。本章では、理想の居場所づくりを考察するためにこの二点について解明することを目的とする。

□ 4-1 理想の居場所に必要な要素

3 章 2 節で 3 つの居場所の先行事例について紹介し分析を行った。その際に、「寄ってっ亭」と「カフェ蔵」の強みとして「定期的に開催していること」「気軽に参加できること」を取り上げ、スウェーデンの若者ひきこもり支援施設「Dev」では、居場所の心地よさの維持と当事者の自立のためには「参加者に寄り添うこと」が必要であるとした。この「定期的に開催していること」「気軽に参加できること」「参加者に寄り添うこと」こそが理想の居場所づくりに際して必要な要素だと考えられる。以下では、それぞれ 3 つの要素について一つずつ説明を行う。

(1)定期的な開催

一つ目の要素は、定期的な開催である。これには理由が二つ存在する。

まず一つ目の理由は、当事者たちにとっての頼みの綱として活用してもらうためである。本稿の 3 章 1 節の居場所の定義にて参加者の社会的不利によって起こる困難の解決も目的に定めた。よって、頼みの綱としての機能も携わらなければならない必要がある。前提として、社会的不利によって孤立に陥ってしまった人々は何かしらの困難を抱えており精神的なダメージを負っている可能性もある。居場所を頼みの綱とする際、頼れる時と頼れない時が不明瞭だと参加者に対して混乱を招く恐れがある。

例えば、3 章の方で紹介した「寄ってっ亭」の買い物難民の高齢者の事例を用いて考える。あのコミュニティカフェで買い物難民の高齢者のサポートができているのは、定期的に開催することで当事者は頼れるタイミングを覚えることができ、そのタイミングを見越して買い物ができているからである。これが不定期開催になってしまうと次にいつ買い物できるかというタイミングが把握できず、実生活に支障ができてしまう。これでは、居場所に参加することは出来るとしても、居場所に頼ることは不可能である。また、孤立化に精神的に苦しんでいる人の場合も同じであり、心を通わせる人や信頼できる人の確保も難しくなると考えられる。

「誰かに自らが抱える問題を解決してほしい」という手段は、頼れる存在を見つけてこそ

実行できるものである。社会的不利により生じる困難の解決の一助として頼ってもらうためには定期的な開催は必要不可欠である。

二つ目の理由は、スタッフが参加者を見守る機能を実行するためである。福祉領域における居場所は、孤立しているという現在の状況から脱却させるという役割も担っているが、それと同時に孤独死の防止も担っている。特に、この見守る機能は持病を持っている人や高齢者に対して有効である。病気によって孤独死してしまう人のほとんどは、一人で暮らしている状況の中で突然発症してしまい、その様子が誰にも発見されずそのまま息絶えてしまうというものである。定期開催を行えば、参加者の様子や参加頻度などから彼らの異常を察知することが可能になる。それによって、突然の病気により苦しんでいる現場に居合わせられる他、カウンセリングなどの処方による自殺防止等に繋がる。参加者たちの一助となる居場所を目指すのならばなくてはならない機能であり、これも頼みの綱同様に定期的な開催が必須になってくるだろう。

以上、二つの理由から定期的な開催は理想の居場所作りには必要な要素であると考えられた。

(2)気軽に参加できること

二つ目は、気軽に参加できる要素である。この要素の必要性は「多世代」に関係する。

1 章の方でも紹介した通り、近年は孤独死の多世代化が広がりつつある。これにより、居場所に参加する世代は 60 代以降の高齢者だけではなく、それよりも若年層の世代にもスポットを当てる必要が出てくる。

コミュニティカフェ等に参加する人々は高齢者の事例が多い。大分大学福祉科学研究センターが発表した「コミュニティカフェの実態に関する調査結果」(2011)では、全国のコミュニティカフェ 511 箇所(有効回収 166 箇所)にコミュニティカフェの現状についてのアンケートを行った。その中の利用者の年齢層を調べた結果では、多い年齢層として 60 歳代が 52.9%、70 歳代以上が 42.0%と他の年代よりも高いことが分かった。また、利用者の性別は「女性が多い」と答えたところは 77.0%と 8 割近くを占めており、「男性が多い」と答えたところは全体の 2.5%と少数となっていることが明らかになった。この調査結果から、利用者のほとんどは女性であり、年齢層は 60 代以上の高齢者が多いことから利用者層に一定の偏りが存在していることが分かる。

もちろん、この調査は 10 年前のものであることから現代と比べて多少の差異があることは看過してはいけない。しかし、このような偏りが生じているとそれ以外の層の利用者が集まらない可能性が出てくる懸念が存在する。この調査結果から具体的に想定すると、高齢者層の人間が集まることで、若年層の人間が「コミュニティカフェは高齢者が使用する場所」と思い込むことや、高齢者が多くを占めることで「入りづらい」といった感覚に陥るというものである。また、そのようなイメージはサードプレイス関連の居場所全体に対

する偏見ともなりかねない。このような世代や性別等による「入りづらさ」や「イメージ」による参入障壁は、多世代化する社会的孤立を抑止する上では解決しなければならないことの一つである。そして、これらのことから気軽に参加できるという要素は重要なものであると考えられた。

(3)参加者に寄り添うこと

3つ目は、参加者に寄り添える環境である。孤立状態の参加者をそこから脱却させるためには必ず必要になってくる要素である。それでは、参加者に寄り添える環境とはどのような環境なのだろうか。

そのヒントが3章3節にて紹介した熊田の研究(2018)にある。彼の研究である居場所を作り上げる際のプロセスの中に「傾聴」というものがあった。それは、居場所を作って社会的孤立を解消したいという当事者から話を聴き、当事者の人生の背景や性格などから強み(ストレングス)を見つけ出し、そこから居場所の目的や運営方針といったものを構想していくというものである。

この傾聴の特徴は、ただスタッフと相談者が話をするのではなく相手から引き出すというところにある。そして、その傾聴が居場所内で生かされるものは「相談できる環境」だろう。

社会的不利によって孤立化してしまった人々は2章2節でも紹介したように、何かしらの悩みや葛藤などを抱えている。そのような思いを長い間一人で抱えたままいることによって、精神的に重い負担を負ってしまいセルフネグレクトや孤独死に陥ってしまう。この自己の追い詰めを防ぐために「相談できる環境」が必要になると考えられる。つまり、参加者に寄り添える環境とは、「傾聴を用いて相談を行うことによって、参加者の精神的負担を減らすことができる環境」となる。傾聴を用いた相談を行うことにより相談者の背景を見出して解決策を考案し、彼らが抱える課題を解決するために然るべき施設(行政機関や医療施設など)等につなげられるようになるのが理想的である。

そして、その環境を維持するために必要になることが「対等な関係を築く」というものである。高圧的で一方的に解決策を提示してしまうと、相談者の意志が尊重されずただスタッフの言いなりになってしまう。お互いに話し合った結果で提案されたスタッフからのアドバイスを受け入れること自体問題はないと言える。しかし、そのような態度やあまりに事務的な態度を取ってしまえば参加者の自立を図ることができなくなってしまう。社会的不利により孤立化してしまった人の中には自尊心が傷ついてしまった人もいることの可能性は否定できない。そのような人々には孤立の解消も必要になるが、自尊心の回復も同時に必要になる。スウェーデンの事例から対等な関係性をもって接して支援することは、自尊心が低い人々に対して重要だというのは明らかになっている。このことから、参加者に寄り添う環境のためには対等な目線での相談というのは重要であると言える。

□ 4-2 「交流」という観点

本研究のテーマである「理想の居場所づくり」を考える際に、前章で取り上げたものの他様々な事例を調べて考えたこととして「交流」が挙げられる。社会的孤立に陥った人々を人や地域社会につなげる居場所には、居場所がもたらす「つながりの強さ」が大切なのではないのだろうかと考えられた。そして、前節で取り上げた 3 つの要素を実現するためにもこの観点が必要なのではないのだろうか。

交流には様々な種類がある、自分と家族・友人・同僚・他人、客と店員、生徒と先生、部下と上司など多種多様なものが存在し、古来より人間社会だけではなく動物にも存在する概念である。そこに生まれるつながりの強さもまた多様であり、家族との間にできる親密的で(時間的に)長いものもあれば、客と店員のように希薄的で短いものも存在する。

このことから、人と人との交流の間には「つながりの強さ」が存在する。交流する相手との関係性によってその強弱は変化する。

このつながりの強弱について研究を行ったのがアメリカの学者である M.グラノヴェターである。この研究に関して、彼は「弱い紐帯の強さ理論」を打ち立てた。これは、紐帯を個人同士の関係として定義し、弱い紐帯は社会統合として社会に貢献するという理論である。強い集団は親密な関係性にあり連帯感は濃いものである一方、弱い紐帯は互いに交流する頻度も少なく連帯感も薄い。しかし、弱い紐帯はネットワークを広げる機能と異なる性質を持つ集団や人とのつながりに長けている。強い紐帯で繋がっている集団は親密さや連帯感こそあるものの、それが起因して自分たちとは異なる集団や人間とは対立関係に持ち込んでしまう可能性が出てくる。よって、この強い紐帯がもたらす異質なものと対立しようとする傾向から、このような弱い紐帯の繋がりやすさという機能があるのではないかという仮説がこの理論である(M.Granovetter 1973)。

この M.グラノヴェターの研究は「転職―ネットワークとキャリアの研究」という労働者の転職についての論文であるが、紐帯という人と人とのつながりに関する視点は社会的孤立の解消にも役立つ概念である。

ここで着目したいのは、強い紐帯と弱い紐帯の特性である。強い紐帯は親密性・連帯感が長所として存在するが、同時にその集団とは異質な者と対立するといった危険性もあり、ネットワークを拡張する上では弱い紐帯の方が優れているという点である。

では、この強い紐帯・弱い紐帯という観念は居場所作りにどのように当てはめることができるのか。M.グラノヴェターが指摘したことの中でも「強い紐帯」「弱い紐帯」「強い紐帯のデメリット」がそれぞれ居場所づくりにあてはまることを以下に述べる。

先ほども述べた通り、強い紐帯には「親密さや連帯感」が長所として存在する。これは、人と人とが良い交流関係を結ぶ上では望ましいものである。とりわけ、居場所づくりにおいてもそのことは重要になるだろう。孤立化からの脱却を目的とした居場所では、その形式や実施体制に関わらず他者や社会とのつながりを持たせることが目的である。居場所の参加者同士、もしくは参加者とスタッフ間でつながりを持たせそれが親密になるということは、彼らを孤立化から脱却させたと言えるはずだ。このことから、「親密さや連帯感」といったものは居場所づくりにおいても重要な要素であることはわかるだろう。居場所内でこれらを生み出すことも一つの目的であると言える。

しかし、この目的にのみ注視し続けることはかえって「強すぎるつながり」を生み出してしまう可能性が出てくると考えられる。具体的には、親密さなどを考慮するあまり「堅苦しさ」や「強制感」を生み出してしまうのではないかという懸念だ。そして、この懸念は、先ほどの本章の小節にて取り上げた、理想の居場所に必要な要素の一つ「気軽に参加できること」に反するものである。(先ほどは、性別や世代の偏りが要因になって「参加しづらさ」が生じてしまうのではないかと考察したがそれとは別の要因として下記に紹介する)。

例えば、「毎日参加しなければならない」コミュニティカフェがあると考えた場合、毎日参加することから、参加者同士で顔を合わせることも多くなることからつながりを持ちやすくなるだろう。しかし、毎日の参加を強制させられれば人によっては参加することに対するハードルが高くなってしまう恐れがある。当人に学校や会社に行きたがらなくなるような感覚が芽生えてしまい参加率の低下を招く恐れが表れ、そのことが周知されれば新規の参加の低下にもつながってしまうと考えられる。このように、親密さを高めるために参加者の自由を奪ってしまう行動は、参加者の「参加しやすさ」を低下させてしまう恐れが出てくるというメカニズムである。強いつながりが居場所内では重要である一方で、例に挙げたような強すぎるつながりは参加者に対して「強制感」を植え付けてしまう恐れがあり、「気軽さ」という要素を保つためには、参加者の自由を奪ってしまう仕様は避けた方が良いと考えられるだろう。

だが、だからと言って「弱すぎるつながり」もまた看過できないものである。本稿が目指す理想の居場所とは、一人で過ごすことができる喫茶店のような場所ではなく、参加者を人や地域と結びつけることが目的である。弱すぎるつながりとは、具体例を挙げるとお店の客と店員のような関係性を指す。(一部の常連客を除いて)大抵の彼らのやりとりは接客を基本としておりマニュアルに沿ったやり取りを行う。コンビニエンスストアの風景を例として考えると、「客が商品をレジに持っていく⇒店員がバーコードを読み取り購入金額を提示する⇒客は金銭を払う」といったやり取りが行われる。そこには親密さや連帯感等は存在せずとても希薄なものである。そのようなつながりの弱さでは居場所としての機能は発揮されずただの喫茶店となり果ててしまい、先ほど述べた 3 つの要素のうちの一つ「定

期的な開催」の中にあった「見守りの機能」も発揮されなくなるだろう。

ちなみに、この「参加しやすさ」という点は、M.グラノヴェターが指摘していた強い紐帯のデメリットである「異なる人間や集団を排除しようとする動き」を防止するものであると考えられる。それには、居場所の主催者の理念を他のスタッフや参加者に共有することが重要になる。第 3 章 3 節にて熊田が「居場所の目的を開設に関わるメンバー間で共有すること」と指摘していた通り、理念を共有することはスタッフが目的を失わないこと、開設・運営していく中で何かトラブル等で躓いた時の軌道修正のためにも必要になるだろう。しかし、M.グラノヴェターが指摘した「異なる人間や集団を排除しようとする動き」は必ずしもスタッフ間だけで起こりうることではなく、参加者の間で起こる可能性を否定できないものである。むしろ、参加者側の方が起こりやすいのではないだろうか。そして、参加者の中でも以前まで「強い孤独感」を抱いていた人ほどその傾向が出るのではないかと考えられた。その理由を以下に説明する。

まず、前提として参加者は「居場所に参加する以前は何かしらの孤立を体験して苦しんでいた」ものとする。つまり、上述した「強い孤独感」を抱いていた人である。孤立によって苦しみが起きることは第 2 章の方で事例や先行研究を概観して説明した通りである。その強い孤独感を抱いてきた中で寂しさや劣等感、不安などの負の感情にさらされてしまえば精神的な余裕がなくなり行動が起こしづらくなってしまう。そのような環境に置かれていた人間がコミュニティカフェなどに参加することで温かく迎え入れられて他人とのつながりを持つことができれば、当事者にとってそこはかけがえのない存在になり、自分を救ってくれた大切な居場所として拠り所となり得る。居場所に参加する以前までの孤立化した環境の度合いによって、孤立経験のない人に比べてその居場所を大切に思う気持ちが強くなるはずである。そこから人によっては強い関心を抱くことによって「今の居場所を変えてほしくない」「荒らされてほしくない」という思いが出てくる可能性がある。

しかし、その気持ちがかえって悪影響を及ぼす可能性は否定できない。具体的には、このような思いから「現状維持」の気持ちが強くなり新規の参加者を寄せ付けなくする、居場所のアップデートを妨げてしまうといったものである。これによって参加しやすさが失われてしまう他、居場所の認知度や過ごしやすさ、居場所内での対立の発生など様々な悪影響が推測できる。だからと言って無暗にその参加者を出入り禁止にすることもまた悪手であると言える。つながりを求めて参加していた当事者のつながりを運営する側から切って孤立化した人間を生み出してしまうのは在り方として矛盾しているからである。よって、そのような事態を防ぐためにも参加者の人々にも理念や目的を説明する機会をどこかに設けてある程度の理解を得てもらうことは必要であると考えられた。

以上のことから、M.グラノヴェターの紐帯の強さについて居場所作りにも当てはまると言える。特に交流の強さという考え方は、前節にて取り上げた 3 つの要素の中でも「参加しやすさ」に強く影響すると考えられた。強いつながりを作るために参加者の自由を奪っ

てしまうと「強制感」が生まれ、強い紐帯のデメリットも居場所づくりにおいても発生するとして参加しやすさに影響が出る可能性があると分析出来た。また、弱いつながりはM.グラノヴェターの研究ではつながりの拡張において有用であるとしたが、居場所内でのつながりが弱すぎると社会福祉領域における居場所としての機能が無くなりコミュニティカフェもただの喫茶店となってしまうとした。これらのことから、居場所作りは人や地域社会とのつながりを形成する場であるが、ただ形成するだけではなく「つながりの強弱」に着目することが居場所づくりにおいて肝要だと言えるのではないだろうか。参加者にとってもスタッフにとっても過ごしやすい環境を作るには、交流という観点は非常に重要度の高いものである。そして、理想の居場所をつくるために交流の観点が重要だとするならば、前節で取り上げた居場所に必要な 3 つの要素を実現するためにも交流の観点は重要だと言える。

□ 4-3 目指すべき交流の度合い

前節では、M.グラノヴェターの研究を紹介しそれを居場所づくりに当てはめながら、居場所づくりにおいて「交流」という観点が如何に重要かを説いた。特に「強すぎるつながり」「弱すぎるつながり」はそれぞれ悪影響を及ぼし、居場所の衰退や本来の機能を発揮しないことが推測できるとした。では、時として様々なデメリットを及ぼすことを鑑みた上でどのようなつながりの強さが理想的であると言えるのか。

結論から述べると、居場所づくりにおける結びつきの度合いは「強すぎず弱すぎずの中間の度合い」が理想的であると言える。しかし、ここで言う「中間」とは単なる「ちょうど半分」という意味ではなく「強いつながり、弱いつながりの両方を採用する」という意味である。この両方の紐帯を取ることで全体的に中間を取れているのではないかと思いこの言葉を使用した。実際に、強いつながりと弱いつながりの両方を採用した居場所はいくつか存在する。例えば、第 3 章 2 節で居場所の実例として取り上げた静岡県の「活き生きサロン 寄ってっ亭」や「カフェ蔵」がそうであると言える。

寄ってっ亭の「施設の様々な利用の仕方がある」ことや「比較的自由に過ごすことができる」というような特徴は、参加者に対して何かを強制させるものはなく、参加者の任意で自由に行動を起こすことができるため弱いつながりの傾向だとみなすことができる。一方で、「倒れていた高齢者の早期発見」や「買い物難民の高齢者へのお手伝い」といった実績は、参加者を手放しに扱うのではなくしっかりと観察しスタッフから参加者へアプローチすることによって実現できたものであると考えられるため強いつながりの傾向であると考えられる。

カフェ蔵での、「誰もが気軽に立ち寄ることができる」という特徴は弱いつながりの傾向にあると言える。強制的に通わされる要素が無く、居場所の対象も高齢者のみに限らず子

どもから大人まで誰もが利用できるというものである。「誰もが気軽に立ち寄れる」というのは参加しやすさの要素でありそれによって「様々な人々が参加する可能性」を伴っている。M.グラノヴェターが「弱い紐帯には異なる人や集団との拡張に長けている」と指摘していることからも、この特徴は弱いつながりの傾向にあると考えられた。他方で、カフェ蔵には「利用者による見守り活動」を行っているという特徴も見られる。これは、強いつながりの傾向にあるのではないかと考えられる。カフェ蔵では、利用者同士の見守り活動を行っている。利用者同士互いに無関心だとその居場所に通わなくなってしまった人がいても気づかない可能性がある。この見守り活動を行えるということは、初対面の人でも他者とつながりが持てる環境があり、互いに無関心にならずコミュニケーションが取れる場であるということである。そのように考えると、弱いつながりよりも強いつながりの方が傾向としてあるのではないかと考えられた。

強いつながりと弱いつながりの両方を兼ね備えている例として寄ってっ亭とカフェ蔵を紹介しその二つを分析した。このことからわかるものとして、このような居場所には「つながりの拡張性」と「互助」の二つの要素が存在しているというのが挙げられる。「つながりの拡張性」とは、寄ってっ亭で言うところの「施設の様々な利用の仕方がある」ことや「比較的自由に過ごすことができる」というような特徴、カフェ蔵で言うと「誰もが気軽に立ち寄ることができる」という特徴を指し、すなわち、『居場所に参加しやすくなる要因』のことである。そして、「互助」とは、寄ってっ亭で言う「倒れていた高齢者の発見」「買い物難民の高齢者へのお手伝い」カフェ蔵で言うと「利用者同士の見守り活動」といった『参加者やスタッフがお互いに助け合う要因』を示す。この二つの要素が存在するため、「強すぎず弱すぎずの中間の度合い」のつながりがある居場所が理想的だと結論付けることに至った。そして、第 3 章 1 節で述べた居場所の定義にこれらの要素があてはまることから、この理想的なつながりを持った居場所は『理想的な居場所』となり得ると考えられる。つながりの拡張性があれば利用者の新規参入の他リピート性の向上にもつながる。そうして何回も通ううちに利用者とスタッフもしくは利用者同士でつながりが形成されて、互助の機能を用いて見守り活動以外にも、お悩み相談や居場所内での自己表現の手助けを行えば、いつしか利用者の孤立感の解消につながるのではないのだろうか。

□ 4-4 居場所に引き込む方法

「強すぎず弱すぎずの中間の度合い」が居場所内での理想のつながりであるとして、「居場所の拡張性」「互助」の要素を持つことからこのつながりを持った居場所こそが理想の居場所であるとした。しかし、理想像を把握できたところで実際にその居場所に人が来なければそもそも居場所としての存在価値が無くなってしまう。それでは、どのようにすれば利用者を集めることができるのだろうか。そのヒントとなるものとして倉持香苗の研究が

挙げられる。

倉持は、コミュニティカフェは福祉コミュニティ機能を果たす場であり、なおかつ開発を志向したソーシャルワークの実践の場であることを明らかにするのを目的として、コミュニティカフェの利用者に対するスタッフのアプローチ方法と利用者や地域住民から捉えたコミュニティカフェの存在意義を見出すためにインタビューや参与観察、アンケート調査を用いて調査を行った。A,B,C,D の 4 つのコミュニティカフェをサンプルとして調査してそれぞれのコミュニティカフェの実情や実態を明らかにした。その結果、利用者への対応として、利用者の特技を引き出す、本人にできることがあれば頼むようにする、話をよく聴く、一人にさせない等の一人ひとりに配慮したアプローチが A,B,C,D 全てのコミュニティカフェにおいて実施されていることが明らかになった。スタッフのアプローチの他にも、人手不足の悪循環、低価格の料金設定による人件費や光熱費の捻出の困難といった人手・資金に関する課題の実情や、コミュニティカフェ D ではカフェを運営する傍らで小規模のフリーマーケットの実施を行い地域内・コミュニティカフェがある地域外までを巻き込んだ活動を行っている例などが存在した。そして、これら調査結果から運営形態の違いがあるものの、個人から地域まで多様なアプローチを行っているスタッフの実践は、開発を志向したソーシャルワークを検討するうえで示唆に富むと結論付けた(倉持 2014)。

上述した引用にも書かれているように、A,B,C,D のスタッフそれぞれが違ったアプローチを行っており実態もまた多種多様にあふれている様子が窺えた。そして、その多種多様な実態にこそ新しい利用者を引き込む要素があると考えられる。

例えば、コミュニティカフェ A は公園づくりをきっかけに、公園前の(A の)代表者の自宅を開放して出来た居場所である。ここの最大の特徴は「自己紹介」である。A では、その日に利用した人もスタッフも昼食時に自己紹介を行い、氏名とその日のテーマに関する話をする。時にはテーマから外れることもあるが、それがお互いの相互理解の場として作用し、「本音で話したい」「誰かに話を聴いてもらいたい」といった利用者のニーズを満たしている。また、「その日の参加者がその日のスタッフ」という理念があり、利用者の自己表現の場を設けているのも特徴である。一人ひとりが何かに関われるようなアプローチを行っていると共に、完璧を求めずに緩い雰囲気を作ることによって自分らしさをアピールする場のハードルを下げている。この「気楽な雰囲気」こそ A が持つ居場所に引き込む要素であると考えられる。公園前ということから、公園で子供を遊ばせる親子などに紹介することが可能であり、「気楽な雰囲気」は居場所への参加ハードルを下げることができる。そして、先ほど述べた利用者のニーズを用いれば新しい利用者を引き込めるのではないかとこの事例からは考えられた。

この A の事例は、気軽に参加できる要因の必要性の再確認とニーズの重要性を確認する

ことができた。そして、このニーズの発見についてはコミュニティカフェ B の事例が挙げられる。B は、幼稚園が終わった後でも遊ばせる場所は出来ないだろうかという思いから開設され、子育て支援だけではなく大人も子供も育ちあう場所として創られた。ある日、B の利用者が DV について悩みを相談することがあり、それを契機に DV 講座を開くことになった。その結果、予定以上の希望者が集まり地域の潜在的なニーズを発見するに至ったという事例がある。DV 講座というイベントが地域のニーズにあてはまり、講座がきっかけでコミュニティカフェの利用者の増加につながる。実際に講座がカフェの利用者増加につながったかどうかという記述はされていないが、こうした講座開設やコミュニティカフェ D のフリーマーケットなど、コミュニティカフェの運営以外の催しや活動は地域住民のニーズを知るきっかけとなり、また、居場所に対する認知度の向上につながるということが明らかになった。また、コミュニティカフェＣは自治体と大学が提携して運営されており、町会の回覧板に頒布物を入れるなどして地域での認知度を上げている。そして、倉持の調査によって、地域住民はＣに対して「何か手伝えることがあれば参加したい」というニーズがあることが判明した。

これら A,B,C,D の 4 つのコミュニティカフェの事例に共通してある要素「気楽さ」「ニーズ」「認知度」が新しい利用者の引き込みのヒントであると考えられる。居場所に参加してもらうためには手始めに知ってもらう必要があり、居場所の認知度を上げなければならない。そして、どのような人に対して需要があるのかをアピールし、参加を躊躇する背中を押すため、息の長い付き合いをしてほしいために「気楽さ」が感じられる雰囲気作りが重要になる。そして、この一連の流れこそが新しい利用者を引き込む方法であり、それを補助するためにコミュニティカフェ B の DV 講座や D のフリーマーケット等のカフェの運営以外のイベントが時として必要なのではないかと考えられた。

5. おわりに

最初に前章のまとめを行う。前章では、理想の居場所をつくるための必要な要素として「定期的に開催していること」「気軽に参加できること」「参加者に寄り添うこと」の 3 つが必要な要素として取り上げた。そして、この 3 つの要素を実現するためにも理想の居場所づくりを実現するためにも必要な観念として、M.グラノヴェターが提唱した「弱い紐帯の強さ理論」を用いて「交流という観点」が必要であるとした。様々な交流の中でも理想的なのが「強すぎず弱すぎずの中間の度合い」のつながりであり、強いつながり弱いつながり両方を採用することによって、その居場所内に「つながりの拡張性」と「互助」の二つの要素が生まれるのではないかと説いた。また、新規の利用者を引き込むための方法を倉持(2014)の先行研究から考察し、結論として「認知度の向上、ニーズのアピール、緩い雰囲気づくり」をベースに、それらを補うものとして居場所の運営の他にイベント等を行うことが方法として挙げられるとした。

本稿では、社会的不利によって社会的孤立に陥ってしまった人の孤立化の抑制のためにどのような居場所が理想的かという考察を、先行研究を概観しつつ行ってきた。「強いつながりと弱いつながりの両方を採用した居場所」が理想の居場所としつつ、新規の利用者を取り込む方法を模索するところまで研究を行ってきたが課題は存在する。

それは、社会的孤立により完全に閉じこもってしまった人に対してどうアウトリーチをかけるかというものである。外出する頻度が少ない人、郵便物をあまり見ない人などは先ほど取り上げた方法ではあまり効力を発揮しないと考えられる。特にこれは、高齢者は自治体によって民生委員などによって見回りが行われることから、高齢者世代より下の現役世代や 20 代～30 代の若年層にあてはまる。若年層は SNS 等のインターネットを使用する人が多い傾向にあることから SNS を用いたアウトリーチの方法も考案した。しかし、昨今しばしば話題になる誹謗中傷問題やアカウントの乗っ取り、貧困やホームレスなどの経済的な社会的不利を負っているとインターネットの使用もままならなくなるなど懸念点が多いことからあまり万全な方法とは言えない。

最後に、一人でいることが必ずしも悪いことではないということは念頭に置いて欲しい。何かトラブルや問題に巻き込まれて精神的な負担を負ってしまったとき、万人が人と関わることでそれを解消できるとは限らない。むしろ、一人になることで冷静になれて、リラックスできる人も存在する。しかし、孤立してしまったことでくるしんでいる人も確実に存在する。そのような人々が日本にどれほどいるかは正確にはわからない。しかし、その数の大小や程度に関わらずそのような人々が存在するのであればなにかしらの解決の道を模索し導くことが社会生活を豊かにする上で必要だろう。本研究が社会的不利による社会的孤立からの復活に助力できるのであれば幸甚の思いである。

○ 参考文献

①東野 定律(2014)「第８章地域社会における居場所の必要性と役割」『ソーシャルデザインで社会的孤立を防ぐ』ミネルヴァ書房出版,218-244
②石田 史樹(2020)「「社会的孤立」研究の到達点と課題」『日本の科学者』,55(11),5-10
③石川 衣紀・田部 絢子・高橋 智(2021)「スウェーデンにおける子ども・若者の「不登校・ひきこもり」問題の当事者中心の支援」『長崎大学教育学部紀要教育学科』,7(85),95-106
④一般社団法人日本少額短期保険協会 孤独死対策委員会(2020)「第５回孤独死現状レポート」,1-19
⑤M.グラノヴェター(1998)「『転職』 ネットワークとキャリアの研究」ミネルヴァ書房
⑥厚生労働省(2021)「社会的孤立の実態・要因等に関する調査分析等研究事業報告書」,9-16
⑦熊田 博喜(2018)「社会福祉の領域で求められる居場所づくりの展開プロセスと技法」『社会福祉研究』公益財団法人 鉄道弘済会,133 号,26-38
⑧倉持 香苗(2014)「第５章コミュニティカフェの福祉コミュニティ機能―事例調査からの検討」『コミュニティカフェと地域社会―支え合う関係を構築するソーシャルワーク実践』明石書店,171-255
⑨菅野 久美子(2020)『家族遺棄社会 ～孤立、無縁、放置の果てに～』角川新書出版
⑩大分大学福祉化学研究センター(2011)「コミュニティカフェの実態に関する調査結果」,14-15